このPDFは，CQ出版社発売の「実践 ハムのモールス通信」の一部分の見本です．
内容・購入方法などにつきましては是非以下のホームページをご覧下さい．
<http://www.cqpub.co.jp/hanbai/books/15/15081.htm>

第5章 実践運用ノウハウ

本章では，CWの醍醐味でもある，実践運用でのノウハウについて紹介します．どちらかといえば，中級者向けで，初心者には難しい点があるかもしれません．しかし，普段からこれらを心がけると，技量は上がります．ローパワーと小型アンテナ，厳しいロケーションでもDXと交信できたり，コンテストで入賞したり，アワードを集めたりできます．SSBとは一味違う体験ができ，なぜ，こんなシンプルなシャックで，すばらしい成果が出せるの？と不思議に思われることでしょう．国内外，どんな場所からでも実用的な運用を楽しめ，読者のハムライフの幅も広がります．もちろん，ビッグ・ステーションで，これらの技を駆使してオペレートすれば鬼に金棒です！

5-1 リグの進歩が変えたパイルアップ

CWでもっとも技量を発揮できるのが，パイルアップを呼んだり，さばいたりするシーンではないでしょうか？ ここではまず，最近のパイルアップについて考え，それに有効なCWテクニックを研究してみましょう．

世界一といわれたJA局のマナーが低下？！

かつて，世界中のDX'erやDXペディショナーから，JA局のパイルアップは世界一統制がとれ，

見本

最高のマナーと絶賛されていました．ヨーロッパの無秩序さに比較すると，JA局に呼ばれると気持ち良い，とまで言わしめました．

一方，最近になって，JA局のパイルアップのマナーが低下した，との感想を一部のベテラン・ハムからよく耳にします．果たして，どんな原因があるのでしょうか？

マナー低下よりレベル差の拡大か？

従来から“ドッグパイル”と例えられるように，一本の餌の骨に群がる野犬の群れの呼称です．あるいは，1匹の子羊を狙う利害の対立した野生オオカミの群れとでもいえましょうか．

表面的に考えると，かつては10～20歳代の若年層オペレーターが多かったので皆純粋で指定をよく守りましたが，今はオペレーターが高齢化したため，あるいはカムバック・ハムが増えたためマナーが不徹底となっている？ などとも言われているようです．

しかし，最近，パイルアップの傾向が上記の野生から，より知的で高度なものに変化しているようです．例えば，空から黄金の羽が振ってくるものとします．これを捕(と)った人はいくらでももらえ，その拾い方に特に法律はなく，マナーがあるだけとします．われ先に奪いあう中で，長い歴史を経て，知的紳士たちはさまざまなルールすれすれのマナーの中での奥義を編み出したのです．リグの高性能化がこの奥義を可能としました．これと，従来の野生的人種が混在し始めている点が，より事を複雑化しているようです．

この問題は，以下に考察するように，これらを駆使(くし)できるオペレーターとそうでない方の差が，昔に比べて格段に開いてきているための現象ともいえるのではないでしょうか？ つまり知的紳士がルールすれすれのマナーで競い合う中に，それを

パイルアップはスリルが楽しい！

知らないワイルダーが，自分の方法で，突進していく．それに紳士がギリギリの技で応戦し，双方がエスカレートするという構図です．

かつてのように，技量もリグもほぼ横並びの場合は，呼ぶ方法もマナーもだいたいが同じようなレベルだったわけです．

同時に，免許制度やリグの発展で，世界的に誰もが海外運用を簡単にできるようになりました．呼ばれる側の個別技量差も広がって，上記の紳士の美技に対応できる局とそうでない局，入り乱れて呼ばれていることももう一つの要因です．

呼ばれる側が皆，1960年代を代表する著名DXペディショナーのドン・ミラー（ex W9WNV）であり，ガス・ブローニング（ex W4BPD）でしたら，混乱はきっと起こらないのでしょう．

設備面

前述のような卓越したビッグガンは，1～2回呼んで応答を待てば，コールバックがある余裕あるスマートな運用でも十分です．

一方，アパマン・ハムや，モービル運用専門のピーナツ・ホイッスルは，一発応答はまず不可能なので，それぞれのテクニックを使うことになり

見本

ます.

おのずと両者の間では，パイルアップに対応する運用方法は異なってくるはずです．JA局のマナーが絶賛された時代は，これほどの差（例えば家にシャックがない方など）はありませんでした.

さらに，リグを見ても，

❶ フル・ブレークインはあたりまえ.

❷ 送受切り替え時間のDSPによる高速化（数ms以下）.

❸ サブ受信機内蔵のリグが標準化．2波同時ワッチは常識.

❹ 高級機はバンド・スコープ実装.

❺ DSPによりIFフィルタ帯域100Hz以下が可能.

以上のように最近の新鋭機の性能には目を見張ります．一方で往年の名機であるFT-101やTS-520クラスのリグも立派に実用になりますし，愛用しておられるOMも数多くおられます．両者のリグで適用できるCWテクニックは雲泥の開きが出てきます（決してこれらの伝統的リグを否定しているわけではありません）．このあたりもパイルアップに際してのCWテクニックの大きな格差の一因かもしれません.

それでは，上記の要因による技量の差を一つひとつ見ていきましょう.

最新リグ vs 在来リグでの運用法比較

最新機能をフルに活用した運用法と，旧来のリグを使用した局が同じパイルアップで呼び合った場合を想定して比較してみましょう.

● デュアル・ワッチの常識化

DX QSOの第一人者で，伝説的なCWの名手だった故JA1ANG 米田OMが『CQ ham radio』誌に長年連載された「How to QSO」で繰り返し「DXにはメイン・リグのほかにサブ受信機を必ず1台使いましょう」と提唱しておられました．その実践理論が現在は，1台のトランシーバにSUB-RXとして常備されることで，各社のHFリグとして完成した姿になりました．かつてはVFO-A/Bとしてスタートし，シグナルワン社のCX-7で形ばかりのサブ受信機が初めて組み込まれた時代からは，隔世（かくせい）の感（かん）があります．ちなみに，初めての本格的2波同時受信は1980年代後半に発売されたIC-780でした.

単純なVFO-A/Bで，自分の周波数は聞こえない状態でDXを呼ぶのと，DX局をスプリットで呼ぶパイルアップ局の両方を同時に聞きながら呼ぶのとでは，全体像の把握力に絶対的な差ができます．したがって，応答率に雲泥の差が出ることはいうまでもありません．2波同時受信は，もはや常識なのです．しかし，旧式リグ1台のみ愛用の方は，この世界は未体験ゾーンなので，ご存じなくとも仕方ないことです．つまりマナーとは次元が異なる問題なのです.

● DSPによる超狭帯域IF

IFフィルタがDSP化されたリグの場合，帯域幅100Hz以下まで絞れます．アナログ・フィルタに比較すると群遅延特性（ぐんちえんとくせい）が良好なのでリンギングもさほど顕著（けんちょ）ではありません．帯域100Hzの世界でパイルアップを聞けば，DXの信号にかぶるパイルアップは1～2局程度で，ほぼ完全に分離して聞き分けられます．つまり，パイルアップではなくなるのです.

一方，アナログ・リグの場合，一般的には250HzのオプションCWフィルタがもっとも狭いです．500HzのCWフィルタしか入れていない方もいます．DSPに比べ2.5～5倍以上広い帯域幅なので，オンフレの場合，パイルアップの密度が2.5～5倍以上濃く聞こえてしまうわけです．当然，

見本